

まちも元気に、ひとも元気に

はじめに

地方のバイパスを走ると、いずこにおいても沿道にはどこも似たようなフランチャイズ店が並び、地域の個性に欠けると思っていたが、昨今では葬儀の斎場が増えているように見受けられる。しかもそれは極めて安普請の造作であることが多く、えも言われぬ物悲しさを漂わせている。

高齢化の進展は重い雲のように我が国を覆い、その陰は我々の行く手を遮るかのようにこの先の見通しを暗いものになっている。こうした漠然とした不安が漂っているのが我が国の今日的な状況ではないだろうか。「地域活性化の推進」もこの高齢化の波をいかに乗り越えるかが問われている。

医学を基礎とするまちづくり

高齢化と言っても全国一様ではなく、中国・四国や南九州などの西日本はほぼピークに差し掛かっているが、東日本や三大都市圏ではこれからより一層深刻な状況を迎えることになる。国民医療費はうなぎのぼりで高騰し、年間40兆円に達し、我が国の経済を圧迫している。高度医療に頼らず国民のQOLを持続させるために、生活習慣病を予防し、未病を治すことに注目が集まっており、最近、医学系の研究者が口々に語るのが「まちづくり」への期待である。

筆者は、早稲田大学重点領域研究機構「医学を基礎とするまちづくり研究所」の所長をつとめている。これまで、医学と都市計画学の両者が交流

する機会は乏しかったように思われるが、「人体」の健康と「都市」の持続性を追求する二つの研究領域が接近することは今日の社会的要請とも言える。

改めて近代都市計画学の草創期を振り返れば、都市を経営するうえでの大命題は「公衆衛生」の確保であり、近代都市計画学は医学分野と密接な関係をもっていた。近代都市建設の発展途上段階において、医学を基礎とする都市計画が世界各地ですすめられたことは想像に難くない。その後、上下水道や公園緑地などのインフラストラクチャの整備、建築規制による日照や通風の確保により、都市の衛生状況は飛躍的に改善される一方、国際競争環境のもとで、急速な経済成長を支える市場の役割を都市が担う時代に至ると、機能主義に基づく都市はメカニカルな機械仕掛けのものへと変貌し、医学と都市計画の間の距離は徐々に広がっていった。

今日、ふたたび、医学と都市計画の出会いが希求される時代を迎えている。もちろん、現代社会の要請は一世紀前とは異なるところにある。

「まち」を介した医学と都市計画学の融合

21世紀に入り、我が国ではこれまでに経験したことのない縮減社会のデザインが希求されている。スマート・シュリンキング策として、コミュニティの再生、民間の事業者の参入、非営利組織の育成、さらに、市民自治力の向上が求められるとともに、快適で豊かなライフスタイルを志向するソーシャ

早稲田大学大学院 教授
早稲田大学医学を基礎とするまちづくり研究所 所長

ごとう はる ひこ
後藤 春彦



ル・ウェルビーイングをめざす時代が到来している。

こうした医療福祉を支える物理的かつ社会的な空間単位として「まち」と呼ばれる概念が極めて重要になりつつある。リアルな生活の舞台としての「まち」を介した医学と都市計画の融合は、人も都市も元気にするための新しい技術領域を提供する可能性を有している。

「医学を基礎とするまち」は、医療福祉健康に関するさまざまな機能や情報が病院や施設内に閉じるのではなく、ひろく「まち」中に展開していくものである。「まち」とは、空間を利用する生活者がいて、生活者によるコミュニティが生まれ、コミュニティによる公共的サービスの提供とコミュニティによる意思決定システムが存在するものである。そして、人間らしく自律した生活ができ、安心して健康に住まい続けることができ、ひとりひとりが自らのライフスタイルに応じて選択できる医療福祉健康サービスがまちなかの適材適所に効率よく提供される。すなわち、健康的で文化的な社会生活が保障されているのが「医学を基礎とするまち」である。

地域包括ケアの単位としては、おおむね30分以内に核となる医療施設へ駆けつけられる中学校区程度の圏域が適当であるとされており、近隣住区論など、これまでの都市計画学の経験蓄積を活用することができる。そのうえで、既存の医療福祉施設のみに頼るのではなく、「まち」の有する環境資源、文化資源、人的資源を総動員して医療福

祉を支えていく力を内発的に生み出していくことが求められる。

これまで都市は、基本的に健常者を対象につくられてきたが、今後、本格的な高齢化社会の到来とともに、健常者ではない市民をユーザーとして都市空間を再生していく取組みが求められる。現在、早稲田大学の「医学を基礎とするまちづくり研究所」は、伝統的な町並みの空き家に医療福祉機能をインフィルする取組みを進めている。「まちなか医療」と「まちなみ景観」という居住環境の質に関わる2つの課題に着目し、それらを同時に解決することにより、持続的な社会資本を形成するための理論と技術の構築をはかるスキームを描くことをめざしている。

むすび

人類の遺伝子を次世代に届ける使命を受けて時空を旅する小さな舟に「人体」をたとえるならば、人類の最大の創作物である「都市」は、人間集団、すなわち、社会の遺伝子を運ぶために時空を航行する母船にもたとえることができる。

「ひとも元気に」は身体的健康、精神的健康の獲得であり、「まちも元気に」は社会的健康の、獲得に他ならないが、客観的な健康のみならず、主観的な健康感も問われることになる。社会の主観的健康感の向上こそが、地域活性化のアウトカムにほかならない。